

カラード石窟群造営に関する一試論

—初期歴史時代の西デカン地方南半部における社会と仏教の関係性を踏まえて—

豊山 亜希（日本学術振興会特別研究員）

インド西部マハーラーシュトラ州サーターラー県に所在するカラード石窟群は、同名の市から南南西約 5 km の丘陵地に点在する、総数 60 窟余の仏教石窟寺院群である。初期歴史時代の中インドにおける仏教センターの一つであった、パールフットのストゥーパ（仏塔）は、笠石や石柱の碑銘に「カラハカタ（カラードの古代名）」の住民による寄進を記録しており、同地が集落としての繁栄を享受していたことを示唆する。一般に 2 期に区分される石窟寺院の造営時期のうち、前期（前 100 年～200 年頃）に比定されるカラード石窟群の造営は、こうした豊かな社会経済状況を背景としたことが推定される。

カラード石窟群に関する先行研究は、19 世紀半ばに植民地政府の行政官や宣教師といったイギリス人が踏査を実施したことを端緒とするが、その理解は現在に至るまで概略的なものに留まってきた。インド全土の石窟群中、随一の開鑿規模であるにも関わらず、個別的精査が回避されてきたのは、彫刻や彩色といった荘厳や碑銘記録に乏しいためと考えられる。先行研究においては、有用な考察材料として個々の石窟の構造的特徴—とりわけ窟群の中核をなすチャイティア（祠堂）窟の構造—に着目し、他の石窟群との比較に基づく形式分類によって、編年が試みられてきた。しかし、提示されたカラード石窟群の相対年代は、1 世紀後半～2 世紀中葉、2 世紀前半～3 世紀、前 1 世紀～2 世紀と、著しい見解の相違を示している。このことは、カラード石窟群の造営意義を理解するにあたって、構造的特徴のより厳密な精査はもとより、考古学や地理学といった関連領域との連携により、分野横断的に初期歴史時代の様相を考察する必要性をも喚起している。

ところで従来、カラード石窟群のチャイティア窟の総数は 6 窟とされてきたが、発表者が 2008 年に現地調査を実施した結果、新たに 1 例の現存が確認された。この造営例は、ファサードに彫り出されたアーチ型の下部中央に矩形の入口を開いて、内部は馬蹄型プランにヴォールト天井を架ける構造を呈し、後陣にはストゥーパ（仏塔）を意図したとみられる岩塊が残る。西デカン地方南半部において、同様に馬蹄型プランとヴォールト天井を備える造営例の分布は、カラードと河川港チプルーンを結ぶ交易路であるクンバルリー・ガート沿いに集中している。造営年代をより下るとされる、矩形プランに平天井を架けるチャイティア窟が多勢を占める西デカン地方南半部において、カラードとその周辺地域は、同地方北半部において確立されたチャイティア窟の様式的規範、すなわち馬蹄形プランとヴォールト天井を備える構造との影響関係を示唆し、新たに確認された造営例はその関係性を補強する。

本発表は、上述した先行研究の成果と問題点を踏まえて発表者の新知見を交えつつ、カラード石窟群の造営意義について再検討するものである。先行研究が採用してきた、チャイティア窟の構造分析を主たる考察方法として踏襲しながら、カラード郊外で実施された考古学調査、同地の社会経済環境の復元に関する歴史地理学の成果を参照することにより、カラード石窟群という事例を通して、初期歴史時代の西デカン地方の社会像と仏教僧院の存在意義について、試論を提示したい。